

# 「福祉・介護の仕事は魅力的なのだ？」



「介護の仕事は魅力がない！」  
は本当か？

## 介

護の現場については、よく、「人手不足で業務負荷が大きい」、「将来像に不安があるため若手職員のなり手がない」など、入職しても長続きしないなどの声が聞かれる。介護業界全体の人材不足が社会問題であることは事実であり、政府からも待遇改善の対策が打ち出されている状況だ。「このような改善の働きかけがあるような業界なのだ！」とてつらく厳しいのだ！」といふイメージが社会に広がってしまっているようだが、本当にイメージ通りの魅力がない仕事なのだろうか？この点を統計データから分析してみたい。

福祉・介護の職場を抜き出して、他の職場と比較するた

めには、サンプル数の多い産業横断的な調査でなければならぬ。毎月失業率が発表される労働力調査では、サン

普爾数が少なくて都道府県別

や細かい産業別

男女別など

の結果が得られないのに、今回は国勢調査を行っている総務省統計局が実施している就業構造基本調査（5年ごと）ではあるが、詳細な就業関係のデータを得るために、世帯総数の約1%に当たる47万世帯を対象に行われている（）から分析を試みようと思う。

この調査によるこの結果を見ると、20代後半から60代以上までのすべてで、それぞれ20万人以上の就業者が福祉・介護の職場で働いていることが分かる。また、全体として女性の働き手の方が多く、特に40代以上では、男性の働き手は少ないことがわかる。

「介護の仕事を続けたいか？」に対する結果は？

（）の調査では、「現在の仕事を続けたい者に對して、「現在

か、それとも転職したいか、あるいは仕事を辞めたいか」を聞いている。

福祉・介護の事業者に働く

ている者について、男女年齢別に表したグラフを図に掲げた（図2参照）。

一般的の傾向として、年齢の若い世代では職場に対しても不満や不満を感じたらフットワーク軽く転職する者が多い

ため、継続就業希望者の割合は低い。しかし年齢を重ねるにつれて職場に定着するようになり、転職も難しくなるため、その割合は高くなっている。継続就業希望者の割合は、

男女とも、20代前半には65%

程度であるが、50代のピークには85%程度にまで高まるの

である。

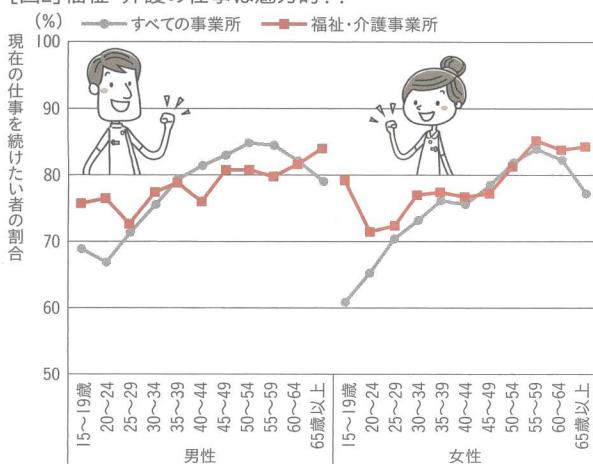
そんな中、一般的の職場と福祉・介護の職場の違いを見るべく、男女ともに30代前半まである。これは、若年層にとって、福利・介護の職場はかなり魅力があるということを意味していると考えられる。

一方、40代を越えると、女性の場合は、継続就業希望者の割合が一般の職場と同程度の水準に近づくが、男性の場合は、一般的の職場の水準ほど上がっていない。若い時期には魅力的な職場と感じられているが、中高年男性の職場としては、仕事の内容、あるいは安定的な収入などの点で、労働条件が厳しく感じられているのではないかと推測される。

[図1] 福祉・介護の職場で働いている人数



[図2] 福祉・介護の仕事は魅力的！？



※現在の仕事を続けたい者の割合は、有業者に占める継続就業希望者の割合。ここで福祉・介護事業所は、産業分類の「老人福祉・介護事業（訪問介護事業を除く）」、「障害者福祉事業」、「訪問介護事業」（有業者数はそれぞれ158万人、28万人、43万人）の計

資料：総務省統計局「平成24年就業構造基本調査」



統計データ分析家  
本川 裕先生

東京大学農学系大学院農業経済学科卒。財団法人国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、アルファ社会科学（株）主席研究員。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイトを主宰するかたわら地域・企業調査等を行なう。著作は、「統計データはおもしろい！」（技術評論社、2010年）、「統計データが語る日本人の大きな誤解」（日本経済新聞出版社、2013年）等。ダイヤモンド社のダイヤモンド・オンラインにWebコラム「本川裕の社会実情データ・エッセイ」を連載中。